

## 第四章 統合關係と繋辭的なもの

### 一

統合といふことは綜合と異なる。それは未分的なる原始綜合の状態でもなく、又已に綜合を了せられたる不可分の状態でもない。幼蟲狀の未成品でもなく、爛熟せる完成品でもない。統合には常に分析作用が介入してゐなければならぬ。否、分析過程そのものが統合の重要な内容となつてゐなければならぬ。分析的契機を見失ひ、或はそれが潜在し或は萎縮せるものは眞の統合の姿といふことができない。故に統合といふことは綜合的分析、分析的綜合の全一態であると言はなければならぬ。未分的原始的綜合の状態に分析作用が介入し一旦分析し、然る後之を不可分的關係に綜合する全過程が統合といふことでなければならぬ。綜合——分析——綜合の過程を包む働が統合作用でなければならぬ。随つて統合といふことは、單なる綜合とか或は分析とかといふことに對し具體的にして生動的な作用と言はなければならぬ。

しかし統合は又單なる結合とも異なる。結合といふことは分析綜合的であり一面に於て統合と似通ふものであるが、結合そのまゝが統合ではない。結合といへば普通に並列的なものゝ對結を意味してゐるに過ぎない。A+B+C……の如き關係に過ぎない。然るに統合は常に矛盾關係の取扱でなければならぬ。統合に於ける分析綜合の過程

は矛盾を以て充されてゐなくてはならぬ。單なる物の結合ではなく矛盾物の取扱でなければならぬ。綜合的原初に於て、相互に矛盾するものを剝離析出し、かゝる矛盾物を矛盾なるまゝ肯定し合一することなければならぬ。統合の内容は矛盾でなければならぬ。故に統合は矛盾的結合ともいふべきものである。分析せられたるものは相互に矛盾的なものであり、その綜合はかゝる矛盾的なるまゝの合一でなければならぬ。

矛盾とは如何なることであるか。之に就き種々に考へられるであらうが、それは先づ二つのものゝ關係でなければならぬ。單なる一や漫然たる多には矛盾といふことはあり得ない。多に對する一に對する多は相互に矛盾的であるが、單なる一や多の中に矛盾といふことは考へられない。それらは何れも種々なる矛盾關係の見らるべき状態であるかも知れないが、未だ矛盾關係の顯現せる状態とは言ひ得ない。眞の矛盾關係といふものは二つのものゝ間に於けるA×Bの如きものでなければならぬ。かゝる二つのものゝ間に於ける關係は如何なるものであるか。それは相互に不可容性的なるものでなければならぬ。相否定するものでなければならぬ。何等連續のよすがなきものでなければならぬ。絶對の否定、眞の非連續性を隔てゝ相對立する關係でなければならぬ。しかし、單に非連續的なものには相關係するといふことはあり得ない。そこには抽象的孤立あるのみである。矢張連續といふことがなければならぬ。絶對の否定を介して直ちに相關係するといふことがなければならぬ。所謂、非連續の連續でなければならぬ。不可容物が却つて相互に眞に補足し合ふことがなければならぬ。一は多でなく多は一でなく、兩者は相互に絶對不可容性的のものであるが、かゝる絶對不可容性を隔てゝ直ちに兩者が結附くところに眞の具體的な世界があり、又一といふことも多といふことも其處から考へることができるのである。縦が横になり得ず横が縦になり得ざ

るところに眞の世界のバランス的統一があり、随つて縦といふことも横といふこともその統一的世界に於て存立してゐるのである。主體的なるものが單に環境的なものに融け行くことは死への道行であり、環境的なものを主體的なるものが單に領有して行くことは所謂末世的所業に外ならぬ。現實の世界は常に主體的即環境的、環境的即主體的として矛盾的統一でなければならぬ。そこに天壤無窮性といふことがあるのである。天道の眞も人道の眞もそこに歸一するのであり、眞の意味のまことか眞實とかいふことは、かやうなところから發出するものでなければならぬ。皇道を大本とする我が國三千年の歴史は常にかゝる眞實なものを實踐して來たのであり、又將來も斯くあらねばならぬ。そこに皇道の世界性があり、八紘一字の大理想の眞義があるのである。矛盾を忌避し抹殺せんとするところに偽善があり邪宗があり、かくて現實世界が迷路に導かれて行くのである。世界惡人生惡の根源は矛盾的現實の嫌惡回避に存するともいふことができる。

統合といふことは總てかゝる矛盾關係の取扱でなければならぬ。それは深い矛盾的關係の底に於て分析綜合することではなければならぬ。所與的なものは何等かの意味で統合せらるべきものである。之をその内外より矛盾關係に析出し、その眞の矛盾的深底に於て綜合して行くことが統合作用である。國家とか文化とかいふものゝ成立は、常にかやうな統合力によつて媒介せられてゐるのである。「すべる」とか「知る」とかといふことはかゝる統合作用に外ならない。しかしてこの統合作用によつて成立するものゝ姿を統合關係と稱する。故に統合關係とは矛盾的結合關係、或は矛盾物の相關々係といふことである。

言語の構造的性、即ち論理的文法事實は廣義に於て統合的關係であるとも考へることが出来る。日本語で先行素が觀念的であり後行素は文法的であるが、かやうな兩者の結合は先づ矛盾關係であると考へることが出来る、殊に觀念語と文法語との結合は、言語上全く性質を異にするものゝ補足的關係である。人間言語が文法的言語である以上、そこに言語材料として先づ對立するものは觀念語と文法語とでなければならぬ。兩者は言語材料として矛盾的なものであり、それらの結合は統合的であると言はなければならぬ。しかし私はこゝで言ふ統合關係は觀念的構造關係に就いてである。觀念語相互の間に於ける統合關係である。勿論觀念語相互の關係に於ても、一般的には先行素と後行素とは統合的である。しかしそれらの中、眞に統合關係と稱すべきものは主語と述語との關係である。論理學上の所謂命題の如きものを形造る關係、謂はゞ判斷的關係である。修飾關係は二つのものゝ結合が全く合一的方向に傾き凝縮的統合とも稱せらるべきものであり、補充關係は修飾關係に比し多少對立的であるが尙合一的方向に傾き、内屬外附の相違があるが共に從屬的附庸的關係であつて、眞の矛盾的結合の關係ではない。之に反して並列關係は要素間の結合は全く對立的方向に傾き、單なる對結に過ぎず、矢張眞の矛盾的結合の關係ではない。然るに主語述語の關係は恰もこの兩方向の正中に位するものであり、眞に矛盾的結合をなすものである。しかも修飾補充の從屬關係にありてはともすれば單一的に傾き易く、並列關係にありては雜多に分散し易いのであるが、主述の統合關係に於ては常に二つのものゝ力的整合が行はれるのである。一に傾かず多に傾かず、眞に二股的である。即ち從屬關係の方は何れかと言へば連續的であり、並列關係の方は非連續的であると言ふことが出来るが、主述の統合は常に非連續的連續でなければならぬ。

統合關係は主語と述語との力的關係であるが、主語とは如何なるものであるか、主語は主題となるものゝ表示である。就いて語られるものである。主題は如何なるものでなければならぬか。主題となるものは常にならぬ。顯揚せらるべきものでなければならぬ。何等か特殊なるものでなければならぬ。しかし眞に特殊なるものは、常に個々別々のものゝ一つでなければならぬ。個物的なるものでなければならぬ。勿論主語として言表されるものには種々のものがあるのであるが、主語的方向は常にかゝる個物的特殊の尖端でなければならぬ。之に對して述語とは如何なるものであるか。述語は説明するものゝ表示である。就いて語るものである。説明は如何なるものでなければならぬか。それは常に包攝し統一する意味のものでなければならぬ。一般的なるものでなければならぬ。前者を多の方向、非連續的方向とすれば、之は一の方向、連續的方向である。かゝる兩方向の結合關係が眞の統合關係と稱するものである。

主述の統合關係は特殊と一般との相即的關係である。特殊即一般一般即特殊、個物即普遍普遍即個物の現實的世界構造の言語的表徴である。實在論理の直接的言語支配である。故に統合關係は言語の觀念的構造中最も根本的なものと言はなければならぬ。修飾關係、補充關係、並列關係等何れも偏向的ではあるがそれ／＼何等かの意味で統合關係的である。しかし眞に矛盾的結合をなすものではない。眞の矛盾的結合は特殊の主語と一般的述語との統合を措いて外にないのである。修飾關係とか補充關係とかといふものは、統合關係的なものが過去のになつてしまつてゐる。之に反し並列關係は未來的とも言ふべきものである。前者は求心的であり、後者は遠心的である。只主述的統合關係は最も言表的現隣に近接して相矛盾するものゝ力的統合をなすものと言はなければならぬ。随つて統合

關係は言語の觀念的相關の最も理想的にして完全なるものと考へなければならず、且觀念的相關の根幹とも言ふべきものである。

此處に於て從來文といふことなども、かゝる統合關係を以て考へられて來たのである。即ち文は主語と述語との結合の如く考へられて來た。修飾關係とか補充關係、或は並列關係的なものを文成立の要件と考へたことはないが、文の定義といへば多く主述の統合關係の如きものを以て爲されたのである。それといふのはつまり統合關係は言表的現實の力點であり、觀念的相關の根幹的なものであるからである。しかし翻つて考へて見るに、主述關係必ずしも文を成すものではなく、又文は必ずしも主述關係を成すものではない。先づ主述關係にあるものでも言表の完結體ではなくて、更に後行的なるものに種々の關係を以て連續して行くのである。そこに文肢といふものが考へられ、複文重文の如きものが考へられるのであるが、かやうなことが主述關係必ずしも文となり得ざる最も手近き證據と言はなければならぬ。主述繫合すれば、必ず完結言表が成立し非連續的となり文となり得るのではなく、それに後續するものゝない場合には文であるが、後續するものゝ先行素である如き場合には文ではなく、句や節の如きものと共に文の一部に過ぎない。更にこの統合關係の意味を押廣げて、凝縮せる統合、即ち私の言ふ修飾關係に屬する如きものを觀念文(Phrase-téle)などと稱する人もある。しかしかく廣げて行けば、修飾、補充、並列あらゆる觀念的相關は皆文と考へなければならぬことになる。その結果、語群は總て文であると言はなければならぬやうになるのである。しかし語群は必ずしも文でないことは言ふまでもない。語文とか單語文とかといふものが一方に存在してゐる。しかも語文の中には、主述の統合關係を有してゐないのであるから、主述關係必ずしも文でないと同

様に、文必ずしも主述の統合を有してゐないのである。こゝに於て語文の如きものを原始的な文として除外例的に取扱はうとする。しかし、縦、原始的でもそれが言表の獨立完結體として結構その機能を果してゐる以上、除外例などとして取扱ふことは出来ぬ。のみならず語文は現實に於て統合文と共に盛に流布してゐるものであつて見れば、少くとも對當的に考へて行かねばならぬ。

一體何故に語文の如きものを文として認めなければならぬのであるか。一般的には語群的なものとか複合表象的なものとか、兎も角結合體連續體が文の主なるものと考へられてゐる中に、獨り語文だけが離れ小島の如く文として立てられなければならぬ理由は何處にあつたか。それに就いては種々の事が考へられるかも知れないが、最も本質的な事情は完結し獨立的であるといふことであると思ふ。然らば語文の如き單一的なものが完結獨立的であるといふのは、言語上如何なる外的表徴に依據するのであらうか。語文の文成立的能記は何であるか。それは如何様に考へても、一般的には斷止といふこと以外にはないのである。語文に於て斷止といふこと以外は何れも皆語彙的特殊的事實である。語文に於ける文法的事實と言へば、斷止的であり非連續的であるといふこと以外にはないのである。そこで考へて見るに、語文は文として認めざるを得ない事實であり、その語文が文法學上文たり得る本質的條件は斷止してゐるといふこと以外にないのであるから、文成立の本質的條件は一般に斷止といふことにならざるを得ないのである。若しそれ以外の條件を以て文の本質を考へようすると、如何にしても語文を包攝することが出来ないのである。從來多く主述的繋合を以て文を考へようとしたのであつたが、それでは只判斷的に構成せられて行く言表に對し都合好く適用し得るのであつて、超論理的に運ばれる、所謂原始文の如きものに對し何等權

威あるものでなく、随つて之等を除外例的なものとして別に認めて行くより方法がないのである。如何にその統合關係的なものを押廣げて行つても同然である。更に語群と言つても複合表象と言つても、語文的なものだけは如何ともすることが出来ないものである。そこで山田博士は述體的なものに對し喚體的なものを新に立てられるのであるが、更にこの兩者を包む文一般としての特質がなければならぬ。しかもそれは單に心理學とか論理學、或は生理學などと言つた外在的補助科學の原理を借用するのではなく、文法學自體が之を自律的に解決して行かなければならぬ。しかしてそれを導き出すには、主述の統合とか其の他種々の結合的なものに執着してゐる以上、絶対に所期の目的を達することが出来ないことを先づ知らねばならぬ。山田博士は從來のかゝる考へ方に一步を進められ、兩者を對立的に取扱はれたのであるが、更に百尺竿頭一步を進め、逆に之を原始的な語文から眺めなければならぬのである。そこには文として究極的なものが見られるのである。その究極的なものといふのは斷止といふこと、非連續的であるといふこと、詞が切れるといふことに外ならない。斯くて文法活動の力で連續して來たものも、それが閉止し斷絶點飽和點に到達したものは文であり、然らざるものは、統合關係の如くその連續的内容が如何に完全であり理想的であつても、眞の文と言ふことが出来ないのである。

斷止するといふことは如何なることであるか。言ふまでもなく、それは連續に對する文法事實でなければならぬ。文法事實を大別する時、連續法とも稱すべき一連と斷止法とも稱すべき一連とに分つことが出來、前者は積極的文法事實とすれば後者は消極的文法事實と考へることが出来る。我が國古來の言を以てすれば、それは詞のつゞきと切れとであり、廣義の手爾波研究はかゝる原理的なものを軸として次第に發達して行つたのである。かやうな譯で、

斷止といふことは連續と全く相反する文法性をなすものである。即ち連續は總て文法活動圏内を包むものであるが、斷止は文法活動圏外を臨むものである。文法活動の極限位に立つものである。文法領域と文法以外の領域との境界をなすものである。文法性が原本的記號性とも言ふべき語彙的なものに直面するところである。斯く文法活動が極限に達するといふことは、言表が終結的となることであり、文が成立することに外ならぬ。斷止は文の生産點である。語文は歩々常にかゝる文の生産點に立つものである。文ならざる語なく、語ならざる文なしと言つた、原始的言語活動である。しかしして言語的連續體にありても、文法活動が終了しその連續が閉止せらるれば、即ち文が成立するのである。

斷止は文を成立せしめる言語的表徴である。文一般の能記は、言語斷止といふことに外ならぬ。然らば斷止に對する連續は何を成立せしめるか。それは一般的に言つて、句を結體せしめるのである。連續といふことは句の能記の外徴である。しかしてかゝる句には種々のものがあるのであるが、其の中最も完全にして理想的なるものは統合關係による句である。主語と述語との統合關係句は眞に此の現實的世界の構成的論理そのものに沿つたロゴスである。特殊即一般の矛盾的力闘關係の句は歴史的現實そのものの言表である。修飾關係、補充關係、或は並列關係等によつて成れる句は、かゝる統合句に對しては依存的補助的たるに過ぎない。しかし、統合句は如何にその内實に於て完全であつても、文となり得ないのである。文となるには終止形の如き形態をとり、斷止しなければならぬ。又之に反して修飾關係とか補充關係とか並列關係などによつて成れる句は、如何に内實的に偏向的未完的であつても何等かの形で斷止すれば文として立ち得るのである。連續法の上では種々の差等があるが、斷止法の前には同等

的である。そのみか、語文の如きものすら之に對當的である。

## 二

統合關係は主語と述語との相關々係である。特殊的主語と一般的述語との矛盾の同一の關係である。矛盾的に相對立する觀念を結合することである。矛盾を析出し矛盾的に合一することである。矛盾的取扱の觀念的相關である。かゝる矛盾的取扱の媒介物は如何なるものであるか。統合關係では主語と述語とに分析し之を陳述として綜合する媒介作用が働いてゐなければならぬのであるが、かゝる矛盾の分析綜合的媒介作用の言語的表徴は如何なるものであるか。統合關係に於ける獨特な文法素は如何なるものであるか。統合關係成立に關する能記物は何であるか。

修飾關係とか補充關係とか並列關係などでは、その分析綜合的な働を表示する文法素は合一的であつた。分析的な文法素、綜合的な文法素と言つたやうに分立してゐなかつた。例へば

靜かに歩く。 しづ／＼と進む。

花を折る。 大阪へ行く。

梅や李 男も女も老も若きも

の「に」「と」「を」「へ」「や」「も」などは分析的であり而も綜合的である。語順といふものも一般に分析的綜合であつて分裂的ではない。然るに統合關係に於ては多くの場合、分析的な文法素と綜合的な文法素とがそれ／＼分立してゐるのである。例へば

花が咲く。 鳥が啼く。

などの助詞「が」は主題としての位格、即ち主格であるといふことを特殊的に明示せんとするものであつて、後行する述格動詞に結合せしめんが爲のものとして働いてゐるのではないのである。即ち種々の補格助詞や修飾格を示す助詞などの如く、分析総合的でなく只管分析的に傾いてゐるのである。出来得る限り一般的なるものから分離し、その特殊の傾向を益々發揮せしめんが爲に添加せられるものである。主語をして述語に對し、どこまでも矛盾的ならしめんが爲に添へられるものである。しかし「が」の代りに「の」助詞を用ひると、かゝる表示力は比較的に緩漫となる。随つて口語では

花の咲く枝 鳥の啼く里

などの如く専ら附屬句の主格を示す場合に用ひられ、文語でも

春たてば花とや見らんしら雪のかゝれる枝に鶯の鳴く。

みやこ出てよはにやきつる郭公あかつきかけて聲のきこゆる。

の如く常に咏嘆の場合に用ひられるのである。主格指示の助詞「が」「の」のかゝる區別は、如何なることに起因するのであるか。それは矢張修飾格指示の場合と同様、「が」は近接的であり「の」は遠隔的であることによるのである。「が」は先行觀念に専ら奉仕し、「の」は之に離接的に奉仕するのである。その爲「が」で示されたるものは主格性を強力に表し、「の」で示されたるものは主格性を婉曲に表すのである。右の中文語では「が」の用法は餘りなく、例へば

青山に日が隠らば 古事記・上

新玉の年が來歴れば (同・中)

鶏が鳴く吾妻 (萬葉・二ノ一九九、三ノ三八二等)

の如き古代的なもの、或は平安朝以後のものでは「あ」「わ」「な」「きみ」「た」等の代名詞に、又

よの中にあらましかばとおもふ人なきが多くなりけるかな 拾遺・二十)

の如く準體言の下にのみ限られてゐるやうである。しかして寧ろ「が」も「の」も添へられない。

花咲く 鳥啼く

の如きものが口語の「が」添加による近接的機能に對應するのである。係助詞の「は」は勿論主格を示す能力は無いが、只分析的性質を極めて強力に表す性質のものである。裁斷的である。随つて

花は咲く 鳥は啼く

などと主格に立つものの下に添へる時、その主格性を特立的に明示する。かやうなことが又「花の咲く枝」「鳥の啼く里」などと附屬句の主格を示す場合に

花は咲く木 鳥は啼く里

の如く「は」を用ひることは絶対に許されない。

主格表示の文法的工作といふものは、總て右の如く統合關係の分析的方向に關するものであるが、之に對し綜合的方向に關するものは何であるか。統合關係の分析力は主格表示の上にあるのであるが、綜合力は如何なるものの

上にあるのであるか。一體統合關係に於ける綜合力といふものはその最終的結末をつけるもの、統合關係の結論的完遂的のものでなければならぬ。陳述作用とか陳述力とかといふものは、かやうな統合關係に於ける綜合的方向に關する働である。しかして分析的方向は主語面に於て働いてゐるが、綜合的方向は常に述語面に於て働くものである。述語の述格たる所以のものは一にかゝる綜合力、即ち陳述作用をその中に寓在せしめてゐることに因るのである。然らば、述語の如何なる部分にかゝる述格的性質が寓在するのであるか。陳述作用、即ち統合關係の綜合力は述語機構の何處に働いてゐるのであるか。それは言ふまでもなく、述語機構の後行部を成す文法素である。主語の主格性を表示する部分はその後行部的文法工作であつたやうに、述語の述格性を表示する部分もその後行部的文法形態である。之に就き二つの種類がある。即ち合融的なものと分離的なものである。合融的なものといふのは例へば

花が咲く。　鳥が啼く。

雨が降るだらう。　橋が架けられる。

壁が白い。　姿が美しい。

それがよからう。　別れがつかつた。

の如く、述語の語尾がそのまゝ陳述作用を表す部分となるもので、動詞とか形容詞とかが述格に立つ場合である。分離的なものといふのは陳述作用部が繫辭的に陳述觀念部と分立してゐるもので、之には種々のものがあるのである。

今之を考へるに先立ち、統合關係の本質を回想して見る必要がある。統合關係は主語と述語との矛盾の結合であつた。しかして主語とは特殊の方向であり、述語とは一般の方向である。故に統合關係は特殊が一般に於て在る關係といふことができる。特殊は何處までも特殊であつて之を一般によつて盡すことが不可能であり、一般はどこまでも一般であつて之を特殊を以て充し切ることのできないものであり、統合關係といふのはこの兩矛盾者の現實的相關々係であるが、之を述語面からすれば特殊が一般の上に在る關係といふことができるのである。主語面から言へば特殊が一般的なるものを超えて特立することであるが、述語面から言へば一般が特殊なるものを内に含み行く關係である。つまり「に於て在る」關係である。分離的な陳述素は、かゝる「に於て在る」ことを抽象的に表示する性質のものでなければならぬ。合融的なものはかゝる「に於て在る」意味のものが、未顯的潜在的に述語の後行部に含まれてあるものであるが、分離的なものはかゝる「に於て在る」ことを記號として明示するやうになつたものである。それは如何なるものでなければならぬか。

先づ之を事實的に言へば、成熟的なものと未成熟的なものと二種ある。成熟的なものといふのは、「に於て在る」ことを單一語的に非分節的に示すものであり、未成熟的なものといふのは、「に於て在る」ことを「に於て」と「在る」とに分節し連語的に示すものである。前者は口語系のものである。

これは櫻だ。      その帽子は君のだ。

風は靜かだ。      ほんたうにうまさうなこと。

それはうそだらう。      山に向かふは村だつた。

私も日本男子です。これは僕のです。

あの方はとても親切です。

なか／＼面白い事でした。

それはきつとあなたの爲になるでせう。

一國に於ても一村落到てもその理は皆同様ぢや。

たゞ人には馴れまじものぢや馴れて後に離るゝるるるが大事ぢやるもの。(閑吟集)  
それは餘りな御言葉です。

世に學者の事業ほど偉大なものはない。

雪溪が冬の世界ならば此所は春の國でせう。

見たなり聞いたなりはつきり言へ

の如き「だ」(ぢや……や)「です」「な」等であり、文語系のものでは  
楠正成は忠臣なり。

口惜しきはわが學を積めることの未だしきなり。

風靜かなる時だにかくの如し。

千家男東京府知事たり。

瑞雲飄颻たり。

茫漠たる平野至る所にあり。

の如き「なり」「たり」等である。後者は口語系のもものでは

こゝは東京驛である。

それは君の帽子であらう。

文學は人生の縮圖である。

この船室は實に綺麗である。

あれは私のものであります。

君は又信仰上の修養に不用意の人ではありませんでした。

小生が西郷吉之助でござる。

先生、それは冗談でござりませう。

それはこの人のおかげでございます。

これは一豊の馬でございます。

の如き「で」ある」「で」でござる」等であり、文語系のもものでは

天地の神なきものにあらばこそ吾が思ふ妹に逢はず死せぬ。萬葉・十五ノ三七四〇

乾政官大臣仁者仕奉倍役人無時波空久置氏在官爾阿利。(續紀・二十二詔)

汝チ宿業拙クシテ今生貧キ身ト有り。(今昔・十七)

但シ貧シキ身ト有ルニ依テ、命ヲ存セムニ便无シ。(同・十二)

の如き「に―あり」「と―あり」、或は

しかそれさる事に侍り。(大鏡)

此らはもとより覺悟の前にて侍れば(保元)

かへすがへすつれなき命にも侍るかな。(源氏・桐壺)

めづらかなる事に候ふとかたる。(更級)

これは東國方より出でたる僧にて候。(諸曲・東北)

右貴意を得たく此の如くに候。

御氣嫌如何に御座候や。

の如き「に―はべり」「に―さふらふ」「に―ござさふらふ」等がある。

以上の中「で―ある」「で―ござる」「に―あり」「と―あり」等成熟なるものは明かに「に於て在る」の「に於て」に略々該當する「で」「に」「と」などを根的なものとして戴き、之に「に於て在る」の「在る」に該當する「ある」「あり」「ござる」等を連結せる連語的な陳述素であるといふことが觀取される。然るに「だ」「です」「な」「なり」「たり」等は、元はかゝる連結形であつたかも知れないが、通時的壓縮を受け兩者融合し一つの成熟語となつたものである。故に語彙的形相を離れ、その本質的機構に就いて考へれば何等相異なるところなきものである。即ち何れも「に於て」の意味のものが先行し、「在る」の意味のものが後行し、この兩者の合一に於て全き陳述素

が成立してゐるのである。特殊的主語と一般的述語との矛盾的相關々係に於て、その綜合的方向を指示する完全な言語記號はかゝる（に於て）＋（在る）と言つた構造性をとるものでなければならぬ。就中「に於て」に該當する「で」「に」「と」などは其の最も生命的な部分で、之を若し失へば繋辭的なものとして抽象せられたる陳述素の意味はなくなるのである。例へば

天氣も穏かで、氣候ものどかだ。

日の出る方は東で、日の入る方は西です。

風さわやかに氣清し。

古松鬱蒼と（して）、瑞雲飄飄たり。

の如く、後行素に並列するものは「で」とか「に」「と」だけでも陳述素としての機能を代行することが出来るのであるが、

そこに君の帽子がある。

大きな公園が幾つもある。

瀬戸内海には至る所に岬あり、灣あり。

おのれが許にめでたき琴侍り。（枕）

其の後御疎遠に打過ぎ申譯御座なく候。

御注文の品は手許に御座候。

の如き、「に於て」を失つた「ある」「あり」等は單なる存在動詞に過ぎない。形式動詞とか形式用言などと稱すべき Copula 的な陳述素ではないのである。しかし又

とのもりづかさこそなほをかきものはあれ。(枕)

わるきものは詞の文字あやしく使ひたるこそあれ。(同)

今めきたる言の葉にゆるぎ給はぬこそねたきことはあれ。(源氏・玉葛)

何事もいけるかぎりのためこそあれ。(源氏・浮舟)

男の御心こそ猶憂きものはあれ。(榮華・月の宴)

の如く「あり」が單獨に繫辭的に用ひられるものもある。之は主として平安朝時代の散文に現れた特殊的現象であるが、文法學上可成重要な事實であると思ふ。故に詳細な點に就いては後に又觸れる機會があるであらうが、兎も角主位觀念部と賓位觀念部との下にそれ／＼呼應的に係助詞を添加する場合にのみ限られてゐるもので、而も「あり」は常に已然形「あれ」となつて現れるのである。謂はゞ特殊的な表情的述法である。存在動詞をかく單獨的に用ひて繫辭的な陳述素の如くせる場合は右の外に

お早うございます。

それでよろしうございますか。

それからお花畑のお話も面白うございました。

の如く、形容詞の連用形がウ音便形となつたものを「ござる」で受ける形のものである。しかし、之は謂はゞ半熟

語的なもので、世にカリ活と稱せられるものと略々對應する性質のものである。即ち「ござる」が多少融着的となり語尾的なものに傾いたものである。しかしカリ活は「くーあり」の約ではない。「くーあり」の如き意味のものであるが、その成立は「かり」でなければならぬ。第一「くーあり」から「かり」に熟合する過程を示すべき證據がなく、又「よくある」「長くある」「美しくある」の如き連結があつたとしても、それは修飾關係の如きものに過ぎない。カリ活の原據はどうしても形容詞の古活用形「か」に求めなければならぬのである。例へば

まさかし善かば (萬葉・十四ノ三四一〇)

かくだにも國の遠かば (同・三三八三)

あずのうへに駒を繋ぎてあやほかど (同・三五三九)

我が行の息衝くしかば (同・二十ノ四四二一)

の如きK系語尾の「か」に再語尾Rが接して

父母は飢寒からむ。(同・五ノ八九二)

山がらや見が欲しからむ。(同・十七ノ五三九八五)

天地の神は無かれや。(同・十九ノ四二三六)

の如きものが生じ

此の泊の濱にはくさぐさのうるはしき貝石など多かり。(土佐)

はしたなめわづらはせたまふ時もおほかり。(源氏・桐壺)

文の道はすこしたじろくともそのすちはおほかり。(空穂・俊蔭)

世の中に多かるふる物語のはしなど見れば。(蜻蛉)

の如く次第に發達して行つたものと見なければならぬ。それは恰も「速けむ」「悲しけむ」「繁けば」「遠けば」「惜しけど」「無けなく」「戀しけまく」などの「け」に「れ」が接して、已然形「けれ」が生じたと同様である。此のカリ活に對應して動詞では、四段活用三段活用なのが「行けり」「爲せり」「立てり」「言へり」「讀めり」「取れり」などの如き形となることがある。之も從來種々に説明せられて來たが、要するに已然形に再語尾が接して成立した派生動詞で、「あり」の接合による熟成動詞ではないのである。しかし再轉活し、或は「り」助動詞などの膠着によつて過去とか完了とかといった時式を表示するものではない。勿論已然形といふ形態は現象の既定性を表示するものであるから、過去とか完了とかといふものに考へられないこともないのであるが、之は單にさやうな時式表示のものではない。又現象の單なる存在性を表示するものでもない。勿論之を動詞に「あり」の熟合せるものの如く考へれば、或はさやうに考へても差支がないやうであるが、嚮にも言つたやうに、「あり」を接合したものではなく「り」を接したものである。「り」は「あり」と同様ではないのである。「あり」は存在動詞で、意義上から言へば一般的であるが、矢張一種の實質動詞と考へなければならぬ。然るに「り」は繫辭的なものである。勿論それは「だ」「です」「なり」「たり」の如く分離的ではないが、少くとも語尾と之等のものとの中間的なもの、半分離的な繫辭、或は形式動詞的語片といつたものと考へなければならぬ。しかも純日本語に於て、語頭に來ることがないものとせられてゐるラ行音のR語片は、眞に純一なる陳述素的姿ではないかと思ふ。装に於ける靡といふものの本領

はかやうなところに在ると思ふ。靡は只漫然と附加せられてあるものではなく、繫辭的本質の端的表示と見なければならぬ。故に靡は必要に應じて動詞形容詞等のあらゆる變化語形に接し得るもので「行けり」「立てり」「せり」等の派生動詞的なもの生ずるのも、かやうな靡現象の一種に外ならぬ。嚮の形容詞カリ活の如きものも、實は斯く考へて行かなければならぬのである。私はかゝる靡的研究を縁として、現行の動詞形容詞の活用體系といふものを今一度見直さなければならぬのではないかと思ふ。現行の活用體系といふものは本居一派の研究、殊に八衢研究の發展したものであるが、更に富士谷文法の装を超え其の源流に溯り、眞の科學的活用體系を立てなければならぬのではなからうか。しかし之等に就いての詳細は後日の形態的論說に譲り度い。

### 三

統合關係は、特殊と一般との矛盾的結合關係である。特殊が一般を超え、一般が特殊を包攝せんとする觀念間の力的關係である。特殊の個がどこまでも獨自的ならんとし、一般者がどこまでも特殊物を包攝せんとする、具體的世界形相の現實的直接的なる表示である。かゝる統合關係に於て、分析的方向に立ちどこまでも獨自的なるものとして特立せんとする主題的なものが主格であり、綜合的方向に立ち無數の主題的特殊物をどこまでも包み行かんとする一般者は述格である。統合關係の主格は具體的世界の分裂的方向遠心力の一角であり、述格は包括的方向求心力の一角である。しかし前者の文法的表示は「が」「の」等の助詞添加、或はゼロ形態的なものであり、後者の文法的表示は用言語尾とか形式動詞などの種々なる繫辭的語片である。次にかゝる統合關係の内實問題に就き、

今少しく立入つて考へて見たい。

統合關係から其の媒質としての文法素を捨象すれば、如何なるものが残るであらうか。統合關係の形相物に對する、質料物の本體は如何なる性質のものであるか。統合關係といふのは觀念間の矛盾的結合の關係であるが、その相關係する觀念性は如何なるものであるか。先づ主格に立つ要素、即ち特殊的個の表示である主語の觀念性は常に實體觀念でなければならぬ。實體觀念以外で特殊物個物を表示することは不可能である。勿論實體語と稱するものの中には

彼がさう言つた。

花咲き鳥啼く。

良心が許さない。

一が數であることを證明するのである限り、パジグラフィは充分である。

の「彼」「花」「良心」「一」の如き本來的實體觀念の語もあるが、

行くのがいやだ。

大きいのがよい。

言はぬが花だ。

負けるは勝だ。

活潑なのがすきだ。

君のはそれだ。

私のはこれでせうか。

の如く、實體觀念以外のものを形態的工作によつて實體觀念の語とせる、所謂準體言の如きものもある。しかし何れにしても主格に立つ觀念性、即ち主位觀念とも稱すべきものは常に實體觀念でなければならぬ。名詞とか代名詞とか數詞などと言つた、實體語の示す觀念性でなければならぬ。又

謠がうまい。　舞が上手だ。

眺が美しい。　通が狭い。

行きは早いが歸りは遅い。

讀みがたしかだ。

の「謠」「舞」「眺」「通」「行き」「歸り」「讀み」の如きものは、通時的に新古の別があるが何れも動詞から實體語として轉成した、所謂轉成名詞とか居體言で、殊更問題はないのであるが、

「歸る」は一つの語である。

「行く」は動詞である。「の」は助詞である。

その「行け」がいけない。「は」は間違である。

「歌ふ」は行動の一種である。

「舞ふ」は感動の表出である。

の如きものでも、それ／＼概念的となり實體觀念化されてゐる以上、矢張主格に立つのである。かやうな主格に立つ語の觀念性は常に實體的でなければならぬのであるが、述格に立つ要素、即ち一般的なるものの表示としての述語の觀念性は如何なるものでなければならぬか。

主格は特殊的個物的方向であり、それが常に實體觀念的表示でなければならなかつた。述格は之に反して、一般的普遍的方向であり、必ずしもその觀念性は實體的であることを要しない。否却つて眞の實在物を包む性質の觀念性でなければならぬ。故に、述格には勿論實體觀念の如きものも立つことが出来るのであるが、それは主格に立つ場合と全く意味を異にしてゐるのである。主格に立つ場合には眞の意味の實體觀念として、特殊的個物的に特立するのであるが、述格に立つ場合はかゝる個物的特殊性を出来るだけ押平めたる抽象概念的なものとして働いてゐるのである。例へば

甲は甲である。

の如き自同判斷と稱せられるものも、一種の包攝判斷と考へなければならぬ。特殊甲に對する、甲一般の關係と考へなければならぬ。然らざれば、かゝる統合關係は無意味である。

これは櫻だ。

の「これ」「櫻」と

櫻はこれだ。

の「これ」「櫻」とは、語彙的には同一であるが、文法上相異なるものでなければならぬ。要するに述格に立つ

實體觀念は、一般者として、包括するものとして働いてゐるのである。主格に立つ實體觀念は、個物的なるものとして立體的であるが、述格に立つ實體觀念は、一般的なるものとして平面的である。前者は物の名の原本性を發揮する意味のものであるが、後者は名の記號化を益々徹底せしめたものである。

かゝる實體觀念に比し、屬性觀念は抽象せられた觀念であるから、一般化は容易であり、優先的に述格に立ち得る性質を有するのである。屬性觀念には現象的なものと狀態的なものとある。前者は言ふまでもなく動詞觀念で、例へば

金がある。 僕が居る。 雨が降る。

鶯が鳴く。 君は見たか。

味方がやられた。 彼がさせたのだよ。

の如きものである。後者には

月が白い。 顔が美しい。

話がうまい。 人柄が興ゆかしい。

の如く、陳述語となれる形容詞のものと

船室が綺麗だ。 それはたしかです。

さうするのが當前である。

月影さやかなり。 榮光燦然たり。

の如く、陳述素を加接すべき從屬語のものとなる。かやうな屬性觀念は本來的に一般概念的であるから、容易に述格に立つことの出来る性質のものである。謂はゞ述格的觀念である。述語に立つ手順は極めて輕易である。しかしその反面に於て、矛盾的結合の力的關係がともすると弱められようとする。勿論、屬性觀念の中にも種々の段階があつて、取分け現象的な動詞性觀念の如きものはその對立性が比較的強力であると言はなければならぬ。又狀態的なものの中にも種々ある中、形式動詞などを加接するものは一般に動詞性のもと略々同様の重みを持つものとしてよい。しかし、屬性觀念が述格に立つものは實體觀念が述格に立つ場合に比し其の矛盾性が徹底して居らず、惡くすると屬性觀念が先行素に吸收せられ、從屬的傾向に逆流しようとしてさへするのである。殊に形容詞が單獨的に述語となる場合に於て、その感が深い。日本語は歐米諸語と異なり、形容詞が本來的に陳述作用を有し單獨に述格に立つことが出来るのであるが、そこに長所もあり又悩みもあるのである。所謂カリ活などの分岐したのも、形容詞のかゝる短所を補はんが爲であると思はれる。單に助動詞連結の都合からではないのである。それは今日の結果からのみ見れば、或はさやうな狀態とも見られるのであるが、カリ活は單なる形態的意味のものではない。助動詞連結などといふことは、右の如き事情で分岐したカリ活に於て必然的に成立した現象でなければならぬ。カリ活以外にも、形容詞の動詞的陳述が種々に試みられ今日に至つて居る。兎も角、形容詞が顯に單獨に述格的地位に立つことは餘りないのである。多くの場合、動詞的なものに包まれて行はれるのである。更に屬性觀念一般に就いて見ても、述語の體言化的傾向が常に動いてゐる。殊に日本語が歐米諸語の論理的文法機構の洗煉を受けてからと言ふものは、かやうな動きが一層顯著となつて來たやうである。そこに又、現行口語の文體といふものは全く形式動詞に

支配せられるやうになり、單調子に流れて行く嫌もないでもない。

統合關係の内實的觀念性は、大略以上の如きものである。即ち主格に立つものは常に實體觀念であり、述格に立つものは實體觀念の場合と屬性觀念の場合とあり、屬性觀念には現象觀念と狀態觀念とあり、狀態觀念には又種々のものがあるのであるが、大別して述素に合融せる形容詞の如きものと分離的な從屬語の如きものとある。しかし、かゝる實體觀念とか屬性觀念とかといふものは、修飾關係に於ても補充關係に於ても同様にその觀念的内實を形造るものである。敢へて統合關係の主格述格に限つたことではないのである。それらと此の統合關係に於ける場合と、その觀念性に如何なる相違がなければならぬか。勿論語彙的には何等異なるところがないものであらうが、文法上然るべき區別がなされねばならぬ。それは如何なる事であるか。

言ふまでも無くかやうなことは、觀念の資料的なものでなく形相的なものでなければならぬ。觀念的機構の問題でなければならぬ。言語の觀念的機構といふことに就いては嚮にも多少觸れて置いたが、修飾關係の如きものに於ては其の深部的なところに於て相互に關係するのである。觀念的機構の深部層的相關々係である。修飾素は被修飾素の眞の内に在るものであり、身柄を全部賭けて從屬してゐるものである。之に對し、同じく從屬關係でも、補充關係の方は中間部的なところに於て相互に關係するのである。補充素は被補充素の眞の内に在るものではない。内屬的ではなく、外附的である。然るべき點に就いてのみ主從關係を結んでゐるのである。觀念的機構の中間部的相關々係である。かやうなものに對し、統合關係に於ては觀念的機構の上層部的相關々係、或は先行部的相關々係であると云はなければならぬのである。

言語の觀念性とは如何なるものであるか。それは文法部に對する單なる觀念部の表示する觀念のみではない。勿論觀念部とか意義部とかといふものは、言語觀念の根元的ものでなければならぬ。觀念根とも稱すべきものである。しかしかゝる觀念根は觀念性の全體を蔽ふものではない。赤とか白とかといふ色感は、「赤い」「赤む」「白い」「白む」などの如き語の示すべき全觀念性を蔽ふものではない。謂はゞそれは概念的な觀念或は名に過ぎない。言語の觀念的機構といふものは、かゝる名辭的な觀念根を核實とせる第二義的緣彙的觀念をも含めたものでなければならぬ。しかも後者の第二義的緣彙的觀念は、文法上寧ろ前者の觀念根よりも重要な意味を持つものと考へなければならぬ。文法學に於て觀念性と稱するものは、前者よりも後者に重點を置いて言ふのでなければならぬ。それは文法的觀念、或は文法義、形態義などと稱すべきもので、種々の文法的機能の重加によつて成立せる言語主觀的な觀念である。文法的習慣によつて生じた一種の非對象的な意義内容である。

かやうな觀念性の機構が修飾關係に於てはその深部層にまで相關係し、補充關係に於ては中間部的に相關係し、統合關係に於ては上層部的に相關係するといふ事が出来るのであるが、かゝる觀念的機構の上中下の深さ位層は如何なることを言ふのであるか。一體言語觀念には分節といふことがなければならぬ。しかしこゝで言ふ觀念分節は、資料的なものに就いて言つてゐるのではない。熟語とか複合語とかといふものの觀念的縊れを考へてゐるのではない。それは只それだけの事で、かやうな事を以て觀念性の分節とか機構などと事々しく言ふのは當らない。かく問題にする以上は少くとも觀念分節といふことは觀念の形相上のもの、觀念の本質に關するものでなければならぬ。觀念性が本質的に分割して行くものでなければならぬ。しかもそこに何等かの能記的なものの對應がなければなら

ぬ。言語を離れた放縱な觀念論ではなく、何處までも記號的身柄を具へてゐなくてはならぬ。橙色を赤と黄とに分けるとか、赤色の中に無數の段階を認めるとかと言つた分析であつてはならぬ。言語觀念性そのものからせられる分節でなければならぬ。かやうな意味の觀念分節は如何なるものであるか。言語の觀念性の核實的なものは語彙的觀念とか語義などと稱せられる觀念根であるが、この觀念根を核實としてその語の觀念的機構が成立するのである。例へば色感「白」を觀念根として、「白い」といふ形容詞の觀念的機構が形成せられるのであるが、それは單なる白の色彩的觀念物ではなく、その色感「白」を核として廣がる言語主觀的な觀念を緣暈とせる機構態でなければならぬ。そこに、「白い月」とか「少し白い」とか「雪より白い」などといった觀念的連結を行ふことが出来るのである。しかし「少し白い」などといふ修飾關係の場合と、「雪より白い」などといふ補充關係の場合とは觀念の相關する地域が異なる。

白く塗る。 壁を塗る。

などでも同様である。かやうなことが一層明瞭に區別せられるのは

白く塗らせた。 左官に塗らせた。

白く塗られた。 左官に塗られた。

の如く、「れる」「られる」「せる」「させる」等の助動詞を添へて動詞性觀念を延展し間接的とせる場合である。修飾素はかやうな場合でも被修飾素の底面にまで及ぶのであるが、補充素は被補充素の中間的延展部なる「せる」「れる」にまでしか及ばないのである。更に

遂に塗らせた。      とう／＼塗られた。

うん、塗らせたよ。      あら、塗られたわ。

の如きものと前掲の「左官に塗らせた」などを比較すると、兩者の區別が一層明かになるであらう。かやうに語の觀念性は、種々の觀念的構造關係に對應して分節する傾向があるのである。そこに相關々係の方から言へば觀念の相關係する機構に深さ浅さといふものがある譯である。

統合關係が觀念的機構の上層部的相關であるといふのは如何なることであるか。それは單なる觀念根の如きものの直接的關係と考へてはならぬ。或は單なる概念關係名辭的關係の如きものと考へてはならない。命題の如き意味のものと考へてはならぬ。勿論、論理的判斷が言表に上せられ命題となつたものは統合關係の一種である。しかし命題の本義はかゝる言語觀念の統合にあるのではなく、論理的判斷そのものである。命題的表示は記號に過ぎない。しかし統合關係は何れかと言へば、殆んど概念關係に近い意味のものであると言ふことが出来る。觀念的機構の深層部と中間部とを捨象せる、概念的なものの一步手前に於て相關係するものである。例へば「すつかり塗らせた」の如きものは修飾關係的であり、「左官に塗らせる」の如きものは補充關係的であるが、「左官が塗る」の如きものは統合關係的である。此の「左官が塗る」は單に「左官」と「塗る」との關係ではなく、「左官」と「塗ること」との關係でなければならぬ。主語「左官」は述語「塗る」の全面に關係してゐるのではなく、「塗る」より抽象せられたる「塗ること」に關係してゐるのである。「月は白い」の如きものも同様。「月」と「白いさま」との相關々係である。かやうなことを最もよく表してゐる事實は

甲は甲である。

海は靜かだ。

の如き、形式動詞加接による述格に於てである。之等は

(甲):(甲である)

(海):(靜かだ)

の如き關係ではなく、常に

(甲):(甲)

(海):(靜か)

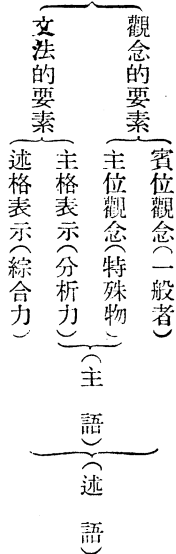
の如き關係である。しかして「である」「だ」の如き形式動詞は、斯く一旦分析せられたる兩觀念を綜合する要素である。かゝる關係に於て主格として分出せる觀念「甲」「海」の如きものは主位觀念であり、之に對立する包攝觀念「甲」「靜か」の如きものは賓位觀念である。故に統合關係は、主位觀念と賓位觀念との分析綜合的關係であると言ふことが出来る。觀念的機構の上層部といふのはかゝる主位觀念、賓位觀念のことであり、かやうなものを統合關係の眞の内實性といふのである。

#### 四

統合關係は特殊的主語と一般的述語との矛盾的結合の關係であるが、かやうなことを今少しく立入つて言へば、先づ主位觀念の特立といふことがあつて、それと同時に賓位觀念が一旦之に對立し、次いで直ちに此の兩觀念のコブラ的統一が成立して行く言語の觀念的構造性である。こゝに統合關係に於ては次の四要素が必須的に備はつてゐる。

なければならぬのである。

統合關係の要素



勿論時により、以上の中の或ものが潜在的となり、或は故意に省略せられて之を缺く場合がある。殊に日本語では主格が立言の環境に吸収せられて叙述面の上に顯現しないことが屢々ある。例へば  
すぐ参ります。

ゆふべ不思議な夢を見ました。

とうとう見附かりました。

の如きものは第一人稱的なものを缺く場合であり

いとお歸りになりました。

何處へいらつしやいます。

あつちへ行つて居れ。

の如きものは第二人稱的なものを缺く場合であり

随分云つてきました。

結構なおしめりです。

幾らに賣れましたか。

の如きものは第三人稱的なものを缺く場合である。其の他

欲しいんだよ、僕。

それぢやつまらないわ、わたし。

の如きものは主格表示の要素を缺く場合であり

おかあさん、お天氣は。

福は内、鬼は外。

の如きものは述格を缺く場合であり

まことに忠臣の鑑。

近ごろ感心な出来ばえ。

花は櫻木、人は武士。

の如きものは述格表示の要素を缺く場合である。しかし之等は何れも右四要素の必須を豫想して行はれる性質のもので、統合關係に於てはその顯現未顯、或は分離融合發展未發展の別はあつても、全くの缺如態といふものは許されぬ。

以上の如き統合關係に於て觀念語に對し或程度の機能範疇を行ふことが出来る。それらの中最も顯著なものは眞

に主語となり得る語と然らざる語とである。單に主語となり得るものと言へば

行くのがいやだ。 大きいのがよい。

行くがよい。 活潑なのがすきだ。

或は

「行く」は動詞である。 「が」は助詞である。

の如きものも考へられ、あらゆる語が主語に立ち得るとも言へよう。しかし眞に主語となり得るものは、それが本來的に實體觀念を表示するものでなければならぬ。前掲のもの如く、一旦實體觀念化の手順を介入せしめる必要なくして、直ちに主語となり得るものでなければならぬ。個物的特殊の觀念性を有するものでなければならぬ。物の名を表示するものでなければならぬ。實體語とか體言とかといふものでなければならぬ。かやうなものが範疇となつて準體言と居體言とかといふものが成立し、其の他の體言化的工作も行はれるのである。

實體觀念とは如何なるものであるか。それは實在界の一角を形造るものを示す觀念でなければならぬ。實在界とは個物的群像である。個物的特殊の相働く世界である。實體觀念といふのはかゝる個物的特殊の觀念的寫映に外ならぬ。統合關係といふのは、實在界の現實的な姿を最も直接的に表示せんとする言語構造である。常に歴史的現實の力的關係に觸れて行く觀念的相關である。しかしてその特殊的方向が主格であり、主語の分析的特立によつて現實世界の特殊の主題相を顯現せしめるのである。随つて統合關係の主語となるべきものは、最も個物的特殊性なる觀念的要素でなければならぬ。個物的特殊の表示をその任とするものでなければならぬ。かやうなものは言ふまで

もなく本來的に實體觀念を表示する語、即ち實體語とか體言とかと稱せられるものでなければならぬのである。故に名詞や代名詞の如き實體語は、統合關係に於て主格的地位に立ち叙述の主題となり、眞に主語となり得るものでなければならぬ。實體語と言へば主格に立つ語、主格と言へば實體語の立つ格といったやうに兩者の關係を考へてもよい。

眞に主語となり得る實體語以外の觀念語は、更に眞に述語となり得るものと然らざるものとに分つことが出来る。只述格の賓位觀念として立ち得るものならば、殆んどあらゆる觀念語を擧げることが出来る。しかし賓位觀念と陳述素とを共に一體として具有し、獨自的に述格的地位に立つことの出来るものは、動詞とか形容詞とかといふものの外にはないのである。之等は一般に用言と稱せられてゐるのであるが、私は或は陳述語といふ名稱の方がよいのではないかと思ふ。と言ふのは、用言といふと習慣上兎角活く詞、活用語といったやうに考へられ易いのである。體言は語尾の變化をしないもの、用言は語尾の變化をするものと言ふやうに考へられ易いのである。(随つて體言も實體語といふ名稱の方がよいと思ふ。) 勿論それは語尾變化を具有する活用には相違なく、又かゝる語尾變化現象は動詞形容詞にとつて極めて重要な形態的事實でなければならない。日本語に於ては活用を説かざる文法書は、動詞形容詞を説かざるに等しいとも言へよう。日本語にあつては極めて重要な文法現象である。故に古來この活用といふことを以て、語の範類の基準とした學者が多數あつた。しかし活用といふことは之等の語の眞に本質的な事實ではないのである。重要な事實には相違ないが、それよりもつと重要な事實があることを見逃して、單なる形態論の見地から活用を先決的條件として考へてはならないのである。活用現象から考察してもよいのである。

が、かゝる活用現象を背後から統括してゐる陳述力といふことを見逃してはならぬ。眞に述語となり得るといふ、第一義的條件を把握することを忘れてはならぬ。かやうな第一義的條件から活用現象といふことも考へられねばならぬのである。陳述力の派生現象として考へられねばならぬのである。かやうな事がよく考へられてゐないことから、活用事實のないものは一切體言であるかの如き考に顛落するのである。歐米諸語や支那語では活用などといふことが無くとも立派に動詞といふものが存立し、又活用に類する屈折現象の如きものが却つて名詞代名詞に在るのである。勿論かゝる外國語の事實を以て日本語を律することは一概に出來ないのであるが、本質的部分はどの言語に於ても一般でなければならぬ。一般文法論的でなければならぬ。

陳述語は賓位觀念と陳述素とを合融的に具有するものであるが、それ以外のものは賓位觀念となり得るか、或は陳述素となり得るか、何れか一方的のものである。賓位觀念となり得るものは從屬語であるが、それらの中主として行はれるものは助詞「に」「と」を添加する性質の状態的なものである。之に對し陳述素となり得るものは、「だ」「です」「なり」「たり」等の形式動詞である。

かゝる状態的從屬語と形式動詞とを分離的に見て行くか合融的に見て行くかといふことは、現今では文法學上未解決の一大疑問であると思ふ。しかし事實的に已に分析的となつてゐるものを、強ひて合融的に取扱つて行く必要は何處にあるのであるか。勿論それは通時的に逆視して探り當てた分析相であるならば又別個の問題であるが、少くとも現實に於て活動的である以上之を敢へて默殺する如き學說の立て方は眞に事實に透徹する所以であらうか。私は此の事を先づ「靜なり」「綺麗だ」の如きものを形容動詞であるなどと主張する人々に尋ねて見たい。しかし

又一方之を餘りにも分離的に考へ、「なり」「たり」「だ」「です」の如き形式動詞を「あり」「をり」「ある」「ござる」の如き存在動詞と同列的に考へてはならぬのである。存在動詞はその内容が一般的ではあるが矢張一種の實質動詞である。しかもかゝる考へ方は通時相と共時相との混同が手傳つてゐる。「に―あり」「と―あり」「で―ある」などが「なり」「たり」「だ」の如くなつたといふ考が之等を存在動詞的なものと考へしめるに至つたやうである。分離的な考へ方が事實の真相を把握し乍ら、合融的な考へ方を容易に克服することの出来ない最大理由はかやうなところに潜んでゐるのではなからうか。しかし之を助動詞の如く考へたり、更に接辭とか語尾の如く考へたりする説は全くの行過ぎである。謂はゞ一種の幻影の上に立つての議論である。若し「靜かなり」の「靜か」と「なり」とが合融的となることあらば然々であると言つた、假設の上での學説である。私はかやうな説に附和雷同する一部の人々を寧ろ氣の毒に思ふのである。「なり」「たり」「だ」「です」を助詞の如く考へる方がまだ取得がある。即ち之等は助詞を戴いて成立せる語片であるからである。しかし私は矢張形式動詞と考へなければならぬと思ふのである。只管統合關係の陳述素となる缺如態の動詞と考へたいのである。それは何も活用の有無といふことを恐れて然言ふのではない。形式的な文法語の一種である助詞を根として成立せる、特異な動詞であるからである。しかし形容詞論者は、又その説の源流となつたとも見做される、例のかり活を如何にするかとも抗議するかも知れない。しかしかり活は形容詞活用の派生的な一活用體系に過ぎない。形容詞の動詞的傾向への一顯現實事實である。現に已然形のケレの如きものもそれであつたのである。しかし已然形には助動詞が附加せられることがないから、現在までそれが氣附かれなかつたまでである。形容詞の活用體系に就いては嚮にも言及した如く、やがて組織換をせられ

日本語の構造

る日が来なければならぬ。